

前回までのあらすじ

流遠るしおやみひめは地元の小学校に通う、普通の小学六年生の女の子。

今年の夏、ひよんな事から知り合った高校生・橘たちばなアサトに片想い中。

謎の少女・ツバキと出会い、彼女を救うために、やみひめは〈機獣少女きじゆう〉となった。危機を脱したものの、事態は収拾していない。そこで、やみひめはツバキに協力を申し出る。

ツバキと交流を深めていく事で、やみひめは様々な事を知っていく。ツバキが、『生きた』という本能的な欲求を持ってない事。彼女のパートナーであり、〈機獣少女〉の武器でもあるMBデバイス（カグツチ）が、過去の記憶を失っている事。彼女等の故郷である惑星ゼヘナの人間は、かつて訪れた地球人との混血である事。そして、そこから生まれた『やみひめの住む地球は並行世界なのではないか？』という可能性。

しかし、彼女等にそれらを確かめる術すべはなく、やみひめは明日から始まる新たな一週間のために、問題を棚上げする。まずは普段通りの日常を維持しなければならない。

—— 〈機獣少女〉である前に、やみひめは普通の小学生だから。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL XXXXXXX**

朝。カーテンの隙間から差す陽光と雀の囀りが、一日の始まりである事を控えめに告げている。

朝とはいえ、照明を点けていないため薄暗い部屋のベッドに眠っているのは、可愛らしい少女だ。艶やかな長い黒髪が白いシートに零れている様は、白い紙に墨を流したような鮮烈なコントラストを成していて、どこか幻想的に映る。普段は少し吊り目がちな色の瞳は、今は閉じられており、あどけない表情を浮かべている。

少女の名前は流遠やみひめ。

小学六年生としては至極真つ当な容姿だが、無防備な寝顔のためか、今は実年齢より少しだけ幼く見える。ほんの三日前——金曜日の事件で衝撃的な体験をし、それは今も進行中なのだが、そんな事情を抱えているとは思えない穏やかな寝顔だ。

——こんにちは。

やみひめの眠る室内に、控えめなノックの音が響く。ほぼ間を置かずに扉を開いたのは、返事がない事を見越していたからだろう。それでも一応、ノックをするあたりに来訪者の律儀な性格が窺える。

現れたのは、やみひめと年代くらいの、これまた可愛らしい少女だ。穏やかな色を湛えた蒼玉のような青い瞳。セミロングの黒髪を左側で片結びにしたサイドポニーが、彼女の歩調に合わせて控えめに揺れる。やみひめとの違いを挙げるとすれば、大人びた澄まし顔だろう。

ツバキ・タカチホ。

惑星ゼーナから来た〈機獣少女〉である。ここ地球では、九州にある同名の土地にあやかって『高千穂ツバキ』と名乗っている。学年はやみひめより一つ下の五年生で、身長は平均的だが、体格に関しては明らかに小学生離れた部位がある。

「——やみひめさん、朝です。そろそろ起きてください」

「うみゆー……」

ツバキが優しく肩を揺らすと、やみひめは寢言なのかよく判らない声を漏らした後、のっそりと上半身を起こした。

「おはようございます、やみひめさん。良い朝で——きゃっ!?!」

目覚めの挨拶を告げていたツバキが素つ頓狂な声を上げた。だが、無理もないだろう。覚醒したと思っていたやみひめが、ツバキの豊満な胸の谷間に顔を埋めてきたのだから。

そう。それこそがツバキの『小学生離れた部位』だ。大人の女性顔負けの豊かに実った双丘。男が憧れ、女は羨む、魅惑の果実……。
要は巨乳なのだ。

ツバキ自身はコンプレックスに感じており、普段は服のコーディネートで隠しているが、いくら視覚的に偽装したところで、圧倒的な質量は隠蔽しようがない。触れられてしまえば終わりである。最新鋭のジャマーやステルス技術も、存在そのものを消す事は出来ない。完璧な偽装手段など、ありはしないのだ。

そんな技術の限界を内心で嘆くという、限りなく現実逃避に近い行為をツバキがしていると、やみひめは胸の谷間に顔を埋めたまま、幸せそうに頬擦りを始めた。

「ふあ……っ!?!」

「えへへ……やーらかーい♪」

「ちよ、やみひめさん、駄目——あんっ」

思わず漏れてしまった自分の声を恥じるように、ツバキは口元を押さえた。頬を紅潮させたその表情は、なんとも扇情的だ。

「ふわふわだー」

「んっ……もう、それ以上は——いい加減にしてください!」

「あだ!?!」

突如、脳天に叩きつけられた手刀チョップによる衝撃で、やみひめの意識は完全に覚醒した。何が起きたのか判らず、目を白黒させる彼女の目に映ったのは、顔を羞恥の色に染めたツバキの姿だった。

「あれ? 朝? おはよう、ツバキ。うー、頭が痛い。なんで?」

「……どうしてでしょうね」

先ほどまでの行為は寝ぼけていて覚えていないのだろうか。やみひめは頭頂部を擦りながら、ツバキの様子が不機嫌な事に気付いた。

「どうかしたの? 顔、赤いよ?」

「知りません……やみひめさんの馬鹿」

「え? ごめん、よく聞き取れなかったんだけど」

「なんでもないです」

ツバキはそっぽを向いて、突き放すように言った。無意識にした事だから、やみひめを責められない。コンプレックスである胸を弄もてあそばれたのは事実だが、しかし、それを説明するのも恥ずかしい。それ故の煮え切らない態度なのだが、ツバキの乙女心をやみひめは知る由もない。

「そう？ ならいいけど……」

ツバキの様子がおかしい理由は判らない。だが、追及しない方が賢明だと悟り、やみひめは言葉を濁した。

「早く起きないと、朝食を食べる時間がなくなりますよ」

口調は少し刺々しいが、それでもツバキがやみひめを気遣ってくれているのは判った。だから、部屋を出て行くこととする彼女の背中に、やみひめはまだ言っていなかった言葉を掛けた。

「ありがとう、ツバキ。起こしにきてくれたんだよね」

その言葉を受け、一瞬、ツバキの動きが止まった。その際、彼女の表情が目まぐるしく変わったが、やみひめの位置からは当然見えない。気付かれないように溜息を吐き、振り返ったツバキの表情は、いつもの穏やかな澄まし顔に戻っていた。

「どういたしまして。お世話になっているのですから、これくらいは当然です」

「それでも、ありがとうだよ」

やみひめが満面の笑みを浮かべると、つられるようにツバキも控えめな微笑で応えた。

「よかった。いつものツバキだ」

「やみひめさんには敵いませんね。……少し、ずるいです」

「え……何の事？」

「何でもありません。あまりゆっくりしていると、本当に遅刻してしまいますよ？」

今日は週明けの月曜日。やみひめは登校しなければならない。

仮初とはいえ（機獣少女）になった。

しかし、その前に普通の小学生だから。

第六話

『機獣少女の護りたいもの』

学校に続く通学路はいつも通りで何も変わらない。まだ誰も（カタストロ）の事を知らないから当然だけど、この街のどこかに、人間には太刀打ち出来ない怪物が潜んでいる事を私は知っている。だけど、知っていてもどうにも出来ないなら、何も知らないままの方が幸せなのかもしれない。知ってしまったら、どこに潜んでいるかも判らない怪物に脅えながら暮らさないといけないから。私の好きな特撮ヒーロー達も、人知れず怪人と戦ってた。

「本当にヒーローがいたら、こんな気持ちなのかな……」

でも、ヒーローには支えてくれる仲間がいる。私にもツバキがいてくれる。事情を知って、助けてくれたり、一緒に悩んでくれる誰かがいるって、本当に幸せな事なんだって今なら判る。

そんな事を考えていると、少し先に見知った女の子の姿が見えた。長い黒髪の一部に白いメッシュが入っていて、瞳の色は赤い。ちよつとだけ近寄りがたい雰囲気もあって、パシクバンドのお姉さんみたいだけど、実は私の友達でクラスメイト。

「おはよう、くらうー！」

つい嬉しくなって、急ぐ必要もないのに駆け出してしまった。二日会わなかっただけに、ひどく久しぶりな気がするのは、私が週末に体験した出来事が大きかったからだと思う。でも、くらうはそんな事は知らないから、私のテンションが高いのに少しだけ驚いた顔をした。

「おはよう、やみひめ。今朝はいつもより元気だね」

でも、きよとんとしたのは一瞬で、すぐに挨拶を返してくれた。黙ってる時は近寄りがない雰囲気だったけど、こうして話す時は穏やかな表情を向けてくれる。

この子は『くらう』。本名はクラウ・P・ブラン。

生まれも育ちも日本だけど、お婆ちゃんがフランス人の、いわゆるクォーター。そのせいなのか、すごい美人さんで、背も高い。ツバキみたいに部分的に大人なんじゃなくて、バランスが良いというか……はつきり言うと、胸だけならツバキの方が大きいけど、スタイルが良いのはくらうだと思う。本当に、ぱっと見たと高校生くらいに見える。前に一緒に街を歩いていた時、高校生だと思われてナンパされた事があったし。ちなみに、私は妹だと思われた……仕方ないけど。

つまり、そのくらいくらうは大人っぽい。それだけに、背中のレストランセルがちよつとだけ痛々しい。

「月曜日だから、気持ちだけでも元気出していかなきゃと思って」

本当はくらうと、またこうして会えたのが嬉しかったからだけど。

「そう？ ……もしかして、週末に何かあった？」

「え……？ 何もないけど、どうして？」

くらうの言葉にドキッとしたけど、気付かれてないよね。本当の事は話せないし、くらは鋭いから、気を付けないと。

「ううん、なんとなく、ごめんなさい、変な事を言って」

「いいよ。心配してくれたんだよね。ありがとう」

友達に嘘をついてしまっている罪悪感と、そんな私を心配してくれてる嬉しさの板挟み。

これは……ちよつと心苦しい。

「そういえば、くらはは週末、結局どこに行ったの？ 遊園地？」

ちよつとだけ気まづくなった空気を変えようと、私はくらうに別の話題を振った。金曜日の帰り道に、そんな話をしたから。

「そのはずだったんだけど、お父さんが土曜日に急なお仕事が入っちゃって。日曜は休めたんだけど、朝から出掛けるのは大変だからって、遊園地には行かなかったの。でも、替わりに街へ買い物に行って、楽しかったよ。本もたくさん買ってもらっちゃった」

遊園地は残念だっただろうけど、買い物も楽しかったんだと思う。買ってもらった本の話をするくらうの表情は、本当に楽しそうだったから。

「そうだったんだ。私も日曜は街に行っただよ」

「そうなの？ やみひめも家族と？」

「ううん。えっと、実は急に親戚の子が家に来る事になってね。しばらく泊るんだけど、本当に急な事だったから、必要なものを買って行ったの。それで、荷物持ちって事で、アサトに付き合ってもらったんだ」

嘘が一つ追加。けど、事情は話せないから、ツバキの事は親戚って事にしないとけない。

「へえ、^{たちばな}橘さんと休日一緒だったんだ。良かったね」

くらうとアサトは夏祭りで会ってるから、一応、面識はある。私がアサトの事を好きなのも知ってるから、こんな風に喜んでくれる。くらはは本当に良い子だ。周りからは『グールビューティ』とか『高嶺の花』とか言われて、ちよつとだけ敬遠されてるけど、本当はぼんやりしてるだけだったりする。けど、美人さんな事もあって、勝手に『群れない孤高の存在』みたいに思われてる。実際は話しやすく、優しい子なんだけど。

「親戚の子も一緒だったから、デートじゃなかったんだけどね。機会があったら、くらうにも紹介するね。一つ歳下の女の子なんだ」

それから他愛ない話をしながら学校まで並んで歩く。待ち合わせをしてる訳じゃないけ

ど、いつの間にか一緒に登校するのが当たり前になっている。くらうと友達になったのが三年生の時で、その頃からだから、もう小学生時代の半分以上は登下校も一緒にしている事になる。

出会った頃は、こんなに仲良くなれるとは思ってなかった。それこそ、当時は私も、くらうの事を遠巻きにしてるだけで、話しかける勇氣はなかったから。

会話が一段落したところで、ふと、そんな事を思い出した。一緒にいるのが当たり前になったから、会話が途切れても普段は気にならない。さっきみたいに気まずい空気になる事は、滅多にない。

しばらく歩くと、もう学校の校舎が見えてくる。登校中の生徒の姿が多くなると、私達に挨拶してくれる子もいる。嬉しいんだけど、呼び方が特殊で……正直に言うとは恥ずかしい。

「あ！ 姫様と騎士様だ！」おはようございます、姫様」「きゃー！ 騎士様、今日も素敵です！」

これは下級生。

「よっ、姫！」「姫ー、算数の宿題見せてー。騎士様でもいいからー」「あれ？ 姫、髪切った？」

これは同じ学年の子達。

そう。恥ずかしながら、私は学校で下級生からは『姫様』、同じ学年の子達からは『姫』と呼ばれている。ちなみに、髪は切っていない。宿題も見せない。

もちろん、全部の生徒から呼ばれてる訳じゃないけど、確実に定着している。今は私達が最上級生だからいないけど、去年まで上級生からは『殿下』と呼ばれていた。今でも一部の先生からは、そう呼ばれている。

くらうは『騎士様』って呼ばれてるけど、これはくらうのファンの下級生が比較的最近になって使い始めた呼称で、あまり定着していない。

『姫様』『姫』『殿下』。

断っておくけど、私は王族じゃないし、そんな血筋でもない。かといって、新手のいじめでもない。面白がって使ってる子がほとんどだけど、悪意はないから嫌な気はしない。最初は恥ずかしかったけど、慣れて怖い。

「人気だね、やみひめ。私も『姫』って呼ぼうかな？」

「やだよ。私の事、ちゃんと『やみひめ』って呼んでくれるの、くらうしかいないんだよ？」

冗談めかして言うくらうに、私はちよつとだけ不貞腐れた感じで答えた。

「ふふ。ごめんね、冗談だよ。こうなった責任は私にもあるしね」

「そう！ だから、くらうだけは『姫』って呼ぶの絶対禁止！」

私が『姫』を始めとする称号で呼ばれる事になった事件。それは、そのまま私とくらうが友達になるきっかけでもあった。今となっては懐かしい思い出。

「うん、判ってる。私もやみひめから名前と呼んでもらえないのは嫌だから」

繰り返すけど、『姫』って呼ばれるのが嫌な訳じゃない。ただ、くらうには本当の名前で呼んでほしいっていうだけ。それはくらうも同じみたいで、前に私が『騎士様』って呼んだら、泣きそうな顔をされて本気で焦った。くらうは見た目も性格も大人っぽいけど、やっぱり私と同じ小学生の女の子なんだって、その時に思った。

私も大人っぽく見られたくて背伸びをする事もあるけど、そういうのをしない、しないでいいのが本当の大人なんだと思う。

ふと、もう一人の子供らしくない女の子の顔が浮かんだ。ツバキは私達とは違う世界で生まれ育って、〈機獣少女〉っていう特殊な立場にいる。それを私の基準や価値観で量^{はか}っちゃいけないのかもしれない。でも、ツバキにも私が思うような幸せを感じてほしいと思う。そのためには――

「うん。まずは学校生活から、ちゃんとしていかないと」

そして、放課後にはアサトと逢^あつて、それからツバキのお手伝いもして、最後はハッピー・エンドじゃなきゃ。

「？ やみひめ、急にどうしたの？」

私のいきなりの決意表明は、くらうには脈絡なく聞こえたに違いない。だけど、いい。くらうなら変な誤解はしないし、察して、追及しないでくれる。それは甘えかもしれないけど、私は信頼だと思いたい。言葉にしないと伝わらない事もある。でも、言葉にしないで伝わる事はあると思うから。

「なんでもなーい」

「ふふ。変なの」

これでいいと思う。今の私は普通の小学生だから。



教室に入って、クラスメイトに挨拶して、何でもない話をして。

担任の神^{かみじょう}譲先生が来たらホームルームが始まって。

授業を受けて、給食を食べて、お昼休みはくらうと図書室に行つて。

掃除の時間があつて、午後の授業があつて、すぐに帰りのホームルーム。

いつも通りの学校生活。

いつも通りの日常なのに、それがすごくかけがえのないものに思えるのは、きっと信じられない体験をしたから。

「やみひめ、今日はなんだか、いつもより楽しそう」

下校途中で、くらうが不思議そうに私を見て、微笑みながら言った。

「うん。だって、楽しいから」

自覚はあった。嬉しい気持ちが表情に出てしまっているだろうと。それはきつと、楽しそうに見えるだろうと。

元々、毎日に何の不満もなかった。特に意識はしてなかったけど、どちらかといえば楽しかったと思う。この毎日が失われていたかもしれない——そう思うと、怖くもなるけど、より今が愛おしくなる。

ただ普通に学校に行って、友達と一緒に過ごしているだけなのに。

ツバキは違うのかな。

こういう『普通』が大切で、護りたいと思って、機獣少女になったんじゃないのかな。

ツバキは自分が空っぽな人間だと言った。

死に場所を求めているのかもしれないとも言った。

でも、機獣少女になろうと決めた時には、何か理想や目標があったんじゃないのかな。

もし、それを失くしてしまったのなら、取り戻してほしい。それが無理なら、別の何かを見つけてほしい。ツバキが幸せに生きられる何かを……。

私にとって、それは家族やアサト、くらう、そして今はツバキも。

私がツバキにとっての『そういう存在』になればいいんだろうけど、そんなのは何様

って感じだよね……。

「ねえ、くらう」

「うん？」

「私の事、好き？」

「……………え？」

ちよつと不安になったから、自分は友達として認められているのか気になって訊いてみただけなんだけど、くらうはすごく真面目な顔をして黙答してしまった。どうしたんだろう。

「……………あのね、私はそういうのを否定するつもりは全然ないけど、やみひめの気持ちには応えられないよ」

「え…………？」

くらうの返答に頭が真っ白になる。「好きだよ」って言うてくれると、信じて疑っていな

かったから。

「そんな……」

私がショックを隠せないでいると、くらうは隠していた自分の正体を仲間にかすヒローみたいな、苦悩や葛藤が入り混じった表情でこう言った。

「やみひめの気持ちはすごく嬉しいよ？ 応えてあげたい。でも、私はそういう趣味はなし、ずっと良い友達のままがいい……それじゃあ、駄目？」

あれ？ なんか会話が噛み合っていない気がする。

…….
そういう趣味って……あ!?

「ち、違うよ!？ 私はただ、『くらうにとって、私は友達?』っていう意味で言ったんだよ!？」

勘違いされてると気付いて、慌てて弁解すると、くらうの顔が真っ赤に染まった。

「ごめんなさい! そうだよね! やだ、私、何を勘違いして……うう」

くらうが恥ずかしさのあまり、その場で頭を抱えて座り込んでしまった。こんな風にくらうが取り乱す事は滅多にない。そういうえば、くらうが読む本には、
そ.
そういうジャンルもあつた気がする。知識が豊富な分、想像力も豊かなんだよね。

「ごめんね、くらう。私の言い方が悪かったんだ。気にしないでいいから、とりあえず立とう? ね?」

大通りじゃないけど、通学路だから普通に人が通っては、私達に奇異の視線を向けている。もしかしたら、体調が悪くて うずくま 蹲つてると思われるかもしれない。そしたら説明しないといけないって、くらうのダメージが増えてしまう。

「ほら、私は全然、気にしていないから。あんな言い方じゃ、勘違いさせちゃうよね。ごめんね。でも、真剣に答えてくれて嬉しかったよ?」

「……. 本当?」

座り込んだままだけど、くらうがようやく返事をしてくれた。

「本当だよ」

「……. 勘違いした事、誰にも言わない?」

ようやく私の方を向いてくれた。目尻に薄っすらと涙が浮かんでる。

「言わないよ。約束」

「……. うん」

私が差し出した小指に、くらうも自分の小指を絡めてくれる。

指切り。

約束を守るという誓い。

これも一種の契約だよね。

絡め合った小指を見て、そんな事を思った。

〔機獣少女〕になる際にも（カグツチ）と契約を交わした。あくまでその場凌ぎしのの仮契約だったけど。

この指切りは、それに比べれば大した事じゃない。命の危険もない。

「くらう、帰ろう？」

「……………うん」

でも、私にとつては同じくらい重い契約。

大事な友達との約束だから。

「……………あのね、やみひめ」

なんとなく小指は絡めたまま、互いに無言で歩いていると、くらうがぼつりとつぶや呟いた。

「私はやみひめの事、好きだよ。大事な友達だと思ってる」

「え…………？」

「さっきの質問の答え。言ってなかったから」

その言葉を聞いてはつとずる。自分で訊いたのに、すっかり忘れていた。最初からそういう言葉を期待していたけど、改めて答えられると、ちよつと照れる。

でも、ここで私が照れてしまったら、くらうはもつと恥ずかしいと思う。

だから――

「ありがとう。そう言ってもらえて、すごく嬉しい」

私は照れずに、堂々と、素直な気持ちを口にした。でも、続く言葉は蛇足だったかもしれない。

「私も、くらうの事、好きだよ――大好き」

「……………っ!？」

また顔を真っ赤にして、くらうは黙り込んでしまった。

やっぱり、くらうはクールなんかじゃない。見た目も性格もすごく大人だけど、本当は

照れ屋で、普通の可愛い女の子。

私の大事な友達。

大事な日常の、大事な存在。

私が護りたい世界の、大事な構成要素。

私はヒーローじゃないから、世界全部はスケールが大きすぎる。

でも、私の護りたい世界――私の手の届く範囲の世界なら護れると思う。

だから、そのために戦えばいい。

私はヒーローでも、神様でもない。

一人の人間に出来る事なんて、たかが知れてる。

だから、出来る範囲でがんばればいいんじゃないかな。

それ以上を望むのは、きつと思いつがり。

「……現実の人間は、ヒーローにはなれないんだよね」

「え……？」

私が漏らしてしまった独り言は、くらうには聞き取れなかったみたい。だから私は「うん、なんでもない」と誤魔化した。だって今のは、本当にただの独り言だから。

つづく

あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第六話をお届け致します。

前々から予告していた『あの子』——『くらう』ことクラウ・P・ブランちゃん、ようやく再登場です。プロローグが昨年七月。サイドストーリー『夏祭り』でも八月なので、半年以上ぶりです。

おぼえていますか？

目と目が会った時を——ではなく、彼女の事を。まあ、今後も出番があるというか、非常に大事な役割なので、嫌でも印象に残ると思います。残します。

今回、本編としてはやや短めでしたが、そもそも更新がない可能性もあったので、ご容赦いただけるとありがたいです。ツバキの出番も少なかったですが、今回も『おっぱい担当』です。大丈夫かな、これから……。

良きところで謝辞を。

まずは『くらう』関連のチェックをしてくださっている紙白さんに感謝を。ありがとうございます。彼女はただの友達で終わりませんので、今後もよろしくお願いします。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。そろそろバトルもやりますので、今後の展開にもお付き合ってください。

2015/2/25 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る